

『資源配置』の概念

大 熊 信 行

目 次

- 一 日常用語と科學用語について
- 二 新らしき政策用語としての『配置』
- 三 一般的用語例における『配置』
- 四 ドイツ勞働配置政策における『勞働配分』の意味
- 五 資力配分の概念と配置概念との關係

1

人間生活のいかなる部門においても實踐は科學に先立つ、——科學の一部門としての經濟學の概念は新らしいが、しかし題目そのものは、いつの時代においても人類の主なる實際的關心の一つであつた。さうジョン・スチュアート・ミルはその主著の冒頭で述べてゐる。この言葉は有名であるが、しかしわれわれは新たな刺激によつてこの言葉を憶ひださなくてはならない時代に臨みつゝある。經濟學の概念は決して一般に古くなつてしまつたのではないけれども、生活の實踐的側面が經濟學の既成概念を取り遺して前へ滑りだしてゐるといふことは事實で

ある。經濟學の既成概念のうち、無用に歸してしまつたものあることは經濟學の歴史の教へるところであり、現にその價值を問はれてゐるものもないのではないが、しかし全體として根本的な變化はない。いまや若干の新概念の追加が必要となつてゐるのである。これは一つの時代的な徴候であつて、おそらく既成の諸概念が根本から搖り動かされる運命を豫告するもののごとくにもおもはれるのであるが、もしさうだとすればこの新らしい徴候は、自然過程概念から機能的概念への轉化であるといふことができ、あるひは現象的・客觀的な概念から本質的・主體的な概念への轉化であるといふこともできる。それは一言にして自由經濟的概念から職能經濟的概念への移行であるといつてもよい。この移行は緩慢である。たとへば『配給』概念のごときは、第一次歐洲大戰以後における顯著な一例であるが、しかし『賣買』といふ用語は死滅したわけではない。『配給』といふ概念用語は明かに國民經濟的見地における機能的な意味を荷なつてをり、商業の本質的職能を明示する。それは商業の社會的理念を語るのである。しかも『配給』の概念規定が配給理論家によつて必ずしも満足に與へられてゐなかつた結果として、今日における『配給統制』の本質は理論的には不明のまゝ放置されてゐる憾みがある。

われわれはこゝに他の一つの新用語を取りあげたいとおもふ。それは『配給』ではなくて『配置』である。『配置』といふ用語は、いふまでもなく日常用語の一つとして、われわれが久しく慣用してゐたものである。これは一般に科學上の概念用語として考へられてゐたものではない。經濟學上のいかなる著作においても、いかなる辭書または教科書においても、われわれはこの用語を見いだすことができず、この用語に該當すると覺しきものさへ發見することができない。それは一定の概念用語としては經濟學のなかに存在しなかつたものである。また日常用語としては、——少くとも日本語の範圍内では、きはめて普通のものであり、用例の驚くべく多岐にわたる

ものである。われわれはこの用語に近似したものとして『配備』といふ用語のあることを知り、またそれは普通に軍事上の用語として用ゐられてゐることを知つてゐる。兩者に共通なものはその主體的・企畫的な語感の強さである。いまや『配置』といふ一つの用語は、國家政策の多くの部面において、突如として何等かの象徴を語るかのごとく使用され、しかも最も根幹的なものの標語であるかのごとく人々に印刻されつゝある。それはすでに學者の用語であり、官廳用語である。それは今日の國家政策における政策行爲の基本形式を表象する用語であるかのごとくにさへ思はれる。經濟秩序の自然的概念から意志的概念への移行における最も顯著な一例がこゝにあることは事實である。にもかゝらず、この用語の概念規定は、これを使用する學者によつて試みられた例を見ない。由來この用語は政策實踐の必要から生じたものであつて、理論的推理における思惟の要具として産れたものではない。實踐は科學に先立つといふミルの言葉のごとく、この用語は科學者の使用から端を發したのではなくて、政策當事者の使用から始まつたものであり、その概念規定こそは理論家に殘された課題なのであるが、しかし理論家は疑はずにこの用語を承けいれ、それが何を意味するかを問ふことなしに今日の政策を論じうると信じてゐるかのごとくである。われわれはこの状態に疑問をもつ。

『配置』概念が理論的な規定を必要とすることは、需要概念や供給概念が理論的な規定を必要とするのとおなじである。われわれにとつても『需要』や『供給』の概念が日常的な程度にとゞまつて差支ない場合があると同様に、『配置』概念もまたその程度で差支ない場合は多いであらう。しかしながら苟くもこの問題を科學的に取扱はふとするかぎり、その理論的な概念規定は不可避のものとならざるをえない。なぜなら、たゞさうすることによつてのみ、われわれは一定領域における知識の内容に統一と調和とを與へることができるからである。しかも

『配置』概念の理論的規定はおそらく二つの角度をもつのであつて、一つは企畫的政策の内部における總體的關聯にかゝはるもの、他の一つは止揚された自然的過程との對照にかゝはるものである。『配置』概念は或るものの否定によつて成立した概念であるから、否定された概念を内に含まずしては正しく理解されたいのである。にもかゝらず、『配置』概念は理論的規定を殆どうけることなしに、その用語の重要性のみが歌はれてゐるといふ現狀は、一面において問題の眞新しさを語るものであると同時に、學者の側における理論的活動の遲滯を告げるものでなくて何であらう。

2

いま、『配置』概念の發祥たるナチスの國民的著作『新獨逸國家大系』に一例を求め、フリードリヒ・ジールツの執筆にかゝる『勞働力の企畫的配置と事業振興』と題する一卷を見るに、その第一篇は『勞働力の企畫的配置』と題し、はしがきを、(一)勞働の概念、(二)配置の概念、(三)ドイツの生産的活動従事者内譯、(四)勞働配置政策の目的と手段、の四節にわかづ。その第一、二節および第四節の敘述はつぎのごとくである。¹⁾

一 勞働の概念

『勞働配置』(Arbeitsinsatz)といふ概念は、『勞働』と『配置』といふ二つの部分概念から構成されてゐる。

この場合、「勞働」とは、動物又は機械の勞働ではなく、たゞ人間の勞働とのみ解すべきである。かやうに、人間の生産行爲といふ一般的限定に従ふならば、實際上は、勞働者及び使用人の勞働が、主要な地位を占め

るものである。

二 配置の概念

労働者及び使用人は、適正に「配置」されねばならぬ。すなはち適正な労働位置に置かれねばならぬ。労働者及び使用人の立場からすれば、その労働位置が彼の體力・知識・経験・の價值實現化と一層の發展並びに彼の生活の建設に役立つ場合、それは彼にとつて適正な労働位置である。企業家の側からすれば、労働者及び使用人が労働位置の要求する身體的・精神的・性格的・な諸條件を充たす場合に、その労働位置は適正に置かれたといふことができる。然しながら、この二つの立場よりさらに上に、労働配置が何よりもまづ全體・すなはち民族・の福祉に役立たねばならぬといふ國家の要求が、嚴然と立つてゐる。

三 (省略)

四 労働者配置政策の目的と手段

國家による労働配置政策の目的は、労働配置の概念から出發すれば判然するであらう。即ち、全體的厚生、換言すれば民族的・人口的・經濟的・社會政策的の大なる觀點に適應するやうに、生産的労働の状態を按配し、労働の流動に方向を與へるといふことである。

この目的を達成するために用ゐられる手段は、多面的である。手段利用の必然性もしくは合目的性については、嚴密な原則は到底立てられない。労働配置政策も、すべての政策同様、たえず與へられた諸關係及びその發展傾向に適合されねばならない。(以下省略)

およそこれらの敘述は、民族社會主義國家における勞働配置政策の根本思想を表現したものであるが、同書は續いてこの政策が執られるにいたるまでの歴史的背景を略述することを怠つてゐない。それは第一次歐洲大戰前には『勞働配置は決して政府の計畫的な政策の對象とはなつてゐなかつた』ことから筆を起し、大戰勃發するや軍事動員は見事に遂行されたにかゝらず、經濟的動員、殊に勞働配置の領域における動員が全く無準備であつたこと、軍事産業においては應召者のあとを補充すべき對策は間にあはず、他の産業部門では失業は飛躍的に倍加したこと、さらに一九一八年には軍隊の復員が、國家をして強力徹底的な勞働配置政策をとらざるをえないやうにしたこと、しかしその準備的な對策も敗戦によつて放棄のやむなきにいたつたこと、それから大戰後の經濟的困難期における失業對策としての勞働配置政策の漸進とその障礙を述べ、最後に民族社會主義運動の制覇にもなふ最大限に積極的な勞働配置政策の實現に到達するのである。それはしかし政策史であつて、それ以外のものではなく、勞働市場機構と勞働配置政策との全面的な諸關係に關する理論的な説明はこれを求めることができない。勞働配給は一般に價格機構内部における事象であるが、勞働配置政策は、市場の需給關係における自然的調整作用およびその諸結果をそのまゝに放置するものではない。それは自然のおよび歴史的成果として發展してきた諸關係に制約されながら、しかも一定の政策目標にむかつてこの諸關係を再組織するものだといふことができるであらう。しかしもし全く何も知らない人が、ドイツの勞働配置政策の綱領だけを讀んで、これを理解したとおもつたときに、その人の頭に泛んでくるものは、おそらく一國を一工場と化した場合の情景であり、一工場内における各種の作業部署への總勞務者の完全に計畫的な配分・配置の規定であらう。

轉じてわが厚生省の人口問題研究會の主催にかゝる第三回人口問題全國協議會(昭和一四年一月)の研究報告

の主題を見るに、これを五部にわかし、第一部は『人口問題に關する一般的研究』、第二部は『東亞新秩序建設より見たる民族、人口に關する研究』、第三部は『長期建設の見地より見たる人的資源の配置に關する研究』、第四部は『事變の國民生活に及ぼしたる影響に關する研究』、そして最後に第五部は『人的資源の維持涵養に關する研究』とする。第三部の研究主題にはすなはちこゝにいふ『配置』といふ新用語を見いだすのであるが、この部門に屬する研究内容として豫め列舉的に呈示されたものは、左の八種である。

産業構造の變化と人口趨勢との關係に關する研究。

人口都市集中に關する研究。

工業並に商業に於ける勞働力需給に關する研究。

農村の人的資源供給に關する研究。

農業生産力擴充と農村勞働力との關係に關する研究。

農村工業に關する研究。

分村計畫に關する研究。

其他都市及農村人口に關する研究。

そしてこの第三部會において兩日にわたつて發表された研究報告十五の題目を列舉すれば左のごとくである。

——(1)農村人口増加力の減衰と其の原因に就て。(2)我が國に於ける所謂過大都市に就て。(3)分村計畫に關する一

研究。(4)大東京の地方計畫方法論。(5)人口統計に於ける産業及職業分類。―主として農業に就て―(6)事變下の青少年勞力の動向と農業勞働。(7)鑛山勞働者の移動に就て。(8)我が國農家の統計的分析。(9)ブラジルに於ける邦人自作農並借地農棉作者の生産層比較及勞力の分配に關する研究。(10)事變化に於ける農業勞働人口構成の變化と農業生産機構の變質。(11)農村流出勞働層と出產死亡との關係。(12)資源配置問題の基本構造。(13)商業に於ける過剩人口の意義。(14)人口都市集中に關する問題。(15)本邦重工業國化過程に起る農村人口關係の諸現象に就て。

すなはちこれらを通じて一見して明瞭なことは、第三部會の主題における基礎觀念をなすべき『資源配置』の思想なるものは、まだ決して諸報告を貫徹してゐるものでないのみならず、厚生省當局が豫め列舉した内容項目の表現においても、右の基礎觀念の浸透はこれを認めることができないといふことである。『配置』概念は主體的・企畫的概念であり、殊に純粹に政策的概念である以上、官廳用語としていち早く採用されることは當然であるが、『資源』そのものの在り方は、そのやうな政策的・實踐的思維形式とは別に、自然的分布乃至自然的集中・移動の狀態として觀察されなければならない狀態にあるといふことも事實である。『資源配置』はいはゞ政策的な一つの理念として泛んだものとゞまるのであつて、右の第三部會の各報告の内容をなすものは、いづれもかゝる理念によつてその方法が自覺的に規定されたものと認めることはできない。それらは正確にいへば、『資源配置』問題以前に屬するものであり、それに先立つて、いはゞ問題の興件として考察されなければならぬことがらに屬する研究であるといふ方が至當である。

以上、われわれは『配置』といふ新用語の今日における用例の一端を見、わが國においてはこの用語が一つの概念用語として通用しなければならぬ場合に臨みながら、理論的な概念規定も反省もまだ行はれてゐないといふ

ことを看取したのである。こゝにしばらくそのやうな概念規定の企てに近づかうとするものであるが、われわれは推理の基礎を窮極的には科學の傳統に求めるのを至當と感ずる。しかしまづ日常用語としての『配置』概念の吟味からはじめるのがよいとおもふ。

3

『配置』といふ日本語は日常生活においてどのやうに使用されてゐるであらうか？ おもふにそれは一定の目的にたいして諸物の位置を合理的に決定する場合にその行爲を表す言葉として用ゐられてゐるやうにおもはれる。第一にそれは客體の位置規定といふ主動的な行爲の概念であり、しかもその行爲は一定目的の達成を目標とするのであつて、客體の位置決定そのものが目的なのではない。客體の位置決定は一定目的にかゝはらしめた秩序の形成としてのみ理解されるのである。客體の位置決定は位置の選擇を意味し、したがつて選擇の範圍内にある一定の空間領域を豫想する。配置概念は一定の時間的な前後關係にも妥當するのであるが、われわれはまづ一定の空間領域における秩序形成行爲としてこれを捉へなければならぬ。一住居における家具一式の『配置』、一室内における調度の『配置』、一卓上における文具の『配置』等のごときである。これらの『配置』はすべて特定の空間的條件のもとに一定の目的に照らして行はれる秩序形成行爲であり、諸物の『配置』状態は目的行爲の結果として理解されなければならぬ。庭園または露地における樹木や庭石の『配置』もまた同様であるが、たゞその場合の目的は實用ではなくて美觀である。『配置』はその目標が何であるにせよ、合目的行爲であり、『配置』といふ用語例にはきはめて目的意識の強い主體的な語感がつねに伴つてゐる。これを『分布』といふ用語の非主體

的な語感と比べればその消息は明瞭であらう。

日常用語としての『配置』の意味は總括しておよそ以上のごときものとすることができるであらう。もし用語例としての範圍を越えて、本質的に同質のものを個人生活の日常的事象に求めるならば、碁、將棋のごとき競技に固有の形式はまさに『配置』の一語に盡きるといふべきであらう。競技者は徹頭徹尾駒または石の『配置』とその展開によつて闘ふのである。この場合の布石または布陣が、勝敗を決せんとする目的によつて一義的に秩序づけられつゝ發展するものであることは誰でも知つてゐる。われわれは轉じて藝術の領域に移ることもできる。繪畫における構圖が多くの場合諸物の『配置』として形成されてゐることは多くの人の知るところである。ダ・ヴィンチの聖晚餐の構圖が、十三人の人物を幾何學的に『配置』して、いかに均齊の美を得てゐるか是有名であるが、キリストを中心としてその左右に十二の使徒が六人づゝ居並び、それがまた三人づゝ塊まつて首をあつめてゐる。十二人が三人づゝ一組になつて四組となり、食卓の向ふ側に耶穌を中心として揃つてゐる姿は、それだけで異常なる美を構成する。これは一つの驚くべき『配置』である。演劇では舞臺面における人物の『配置』とその動的發展の指導こそ、舞臺監督の主要任務の一つに數へられるであらう。俳優のそれぞれの位置は、動きながら絶えず觀客の視野にとつて一定の均衡をたもつて發展しなければならぬ。およそ『配置』といふものは何等かの合目的性をもつて一貫されたものでなければならぬが、その合目的性の意味内容がそれぞれの場合によつて異なるのである。――筆者は音曲における『配置』の問題について注目すべき報告をえた。それによると、音樂の作曲理論上主要のものである和聲法や對位法等^{コンポジション}は、作曲技術並に法則として音節および部等の『配置』の問題を含むもののごとくである。オーケストラの各部門の『配置』や構成が一定の秩序ある配列を要請され、音の性質

のそれぞれ異なるものが、和音の均衡の中に統一されなければならないことはいふまでもない。さらに轉じてこれを一般に生産經濟における箇々の經營内部の問題としてみるならば、およそ資本財の具體的設備および組織にして『配置』の形式をとらぬものはなく、勞務の組織にして各部署における人員『配置』の形式から脱却しうるものはないことを知るであらう。

以上、われわれは必ずしも『配置』といふ日本語の現實における用語例の範圍にとゞまることなく、本質的にこの用語の妥當する多くの事例を包括したのであつて、こゝに一應の概念規定を試みてもよい場合に到達したと考へる。すなはちそれは全體的展望または全體關聯的意識のうへに立つところの主體的意圖および行爲關係の基本概念であり、合目的性による理解および評價の可能なるものである。『配置』概念は、單一なる客體に關する場合でも、これを一定の問題的な空間領域に置くことの決定及びその位置の選定として成立するのではあるが、しかし『配置』の對象となるべき客體はむしろ單一ではなくて種類と數量とにおいて多様であるのをつねとし、したがつて『配置』はそれらの位置決定における諸行爲の相關性を意味するものでなければならぬであらう。といふのは、一つの問題的な空間領域における客體aの位置決定と客體b・客體cその他の位置決定とは相互に無關係ではありえないといふことにほかならぬ。『配置』概念はしからは二重性のものであり、一つは箇々の位置決定が他の事物との關係から一應切りはなされて單獨な行爲として理解される場合、他の一つはそれら箇々の行爲を統轄し、箇々の行爲の底にあつて、箇々の行爲をして然かあらしめるところの統一的な計畫行爲として理解される場合、これである。われわれは前者の場合を呼ぶにも『配置』といひ、後者を呼ぶにもおなじく『配置』といふ。勞働配置政策と稱する場合の『配置』は明かに後者でなければならぬ。われわれは『配置』行爲なるもの

が總じて合目的性のものであり、特定の目的にかゝはらしめて理解されるものであること、したがつてまた必ずや評價され得るものであることを特に注意しなければならぬ。『配置』といふ用語には、『正しき配置』『一層正しき配置』『美しき配置』『一層美しき配置』『賢明なる配置』『誤れる配置』などといふごとく、評價を示す修辭の伴ふことは自然といはなければならぬ。

4

われわれはすでに『配置』概念と對照すべきものとして日本における『分布』の概念を一度擧げた。『分布』といふ概念用語は、わが國では廣く且つ久しい用例によつて、一般に自然現象的な一定事物の地域的存在における數量的な位置關係を語るものである。日本の氣象學において『氣壓の配置』といふごとく、純粹の自然現象にも『配置』といふ用語の用ゐられる例が全くないのではないが、總じて日本語で『分布』といふのは、博物學的、地理學的概念であり、『産業の分布』『人口の分布』といふ場合のごとき、事物の地域的存在の數量的な位置關係を示すにあたつて、いはゞ因果論的立場において、そのやうな諸關係の成立を自然過程または趨勢として客觀する方法を語るものである。『配置』が目的論的概念であるにたいして、『分布』は因果論的概念であると主張することは、日本語の範圍においては、おそらく多くの反對に遭遇することなしに通過し得るところであらう。『分布』は久しく科學用語であるが、自然科學的用語であり、いまにして『配置』が科學用語たらねばならぬとすれば、これは政治科學的用語として要求されてゐるものである。しかし政治科學といへども、事實の因果論的認識の基礎を離れて存在すべからざるものである以上、『配置』概念によつて『分布』概念が代置されるであらうといふ想

像は誤解でなければならぬ。『配置』は『分布』關係の否定であるとしても、その否定は『分布』關係を含みあげた否定でなければならぬからである。この點は特に重要である。

科學的概念は日常生活の概念よりも後れて、日常的概念の正確化として成立することもあり、また日常生活とは無關係に全く理論的に生れる場合も多々あり、人間生活に直接に關係ある科學においては、多くの日常語が次第に強化され深められて科學語になるといふことは何よりも經濟學の歴史がこれを證明してゐるといふことができる。『勞働配置』概念は最も新しい政策的現實の必要から生れ、十分な理論的規定を受けることなしにドイツの政策當事者によつてまづ使用され、日本では二三の有力な政策學者（——その殆どすべてが社會政策學者であることは注目に値する）によつて直ちに輸入され、ひろく使用されるにいたつたものであるが、この概念用語を使用する諸學者は、一人としてこの用語が何を意味するかを問はず、またこの新用語が荷なつてゐる概念の原型はこれを科學の傳統のなかに求め得るやいなやを問はない。しかし『資源配置』の概念に最も近いものを既存の理論に求めて、われわれが『資源分配』の概念に逢着することはきはめて自然といふべきであらう。

こゝに注意すべきは、前掲の著作にも見えるところであるが、ドイツの勞働配置政策の法律的表現のなかには、『配置』ではなくて『配分』の用語を特に使用した例があることである。一九三四年五月十五日の『勞働配置ノ規制ニ關スル法律』につゞく同年八月十日の『勞働力配分ニ關スル命令』のごときがすなはちそれである。一九三五年二月二十六日の『勞働手帳實施ニ關スル法律』はこれに續くものであつた。われわれはこの場合における『勞働力配分』の語義を經濟學における傳統的な配分概念と混同してはならぬ。『勞働力配分ニ關スル命令』の最も重要な規定は次ぎのごとくである。——經營もしくは行政官廳の各指導者は、かれの從屬者團の構成を檢査する義

務を有す。しかして該検査は、労働者及び使用人の年齢構成が、かれの経営もしくは行政官廳の經營技術上及び經濟上の諸要求を顧慮した上、二十五歳以上の労働者及び使用人よりも年長の失業者及び使用人殊に子供の多い家族の父親の優遇を要求する國策的觀點に、適合してゐるか否かに及ばねばならぬと。すなはちこの規定は年少労働者が優先的に雇傭されることを防ぐものであり、年長の仕事仲間のために年少労働者がその位置をゆづり、しばらくは他の場所たとへば農業・工業・労働奉仕において、また少女ならば家事においても、有益に働くことを期待するものであつた。経営指導者は從屬者の年齢的編成替を行ふべしとすることがこの命令の骨子のごとくであり、年少の労働者および使用人の部署を、既婚の失業者にゆづらしめることよつて、労働部署の各人への分配を一層適正ならしめようとするものであつた。すなはち『労働力配分ニ關スル命令』にいふところの『労働力配分』とは労働の部署または労働位置の適正なる分配の意味であり、分配を受ける立場にあるものは労働者（または失業者）なのである。かゝる意味の『配分』が、經濟學の傳統的な理論における『資源配分』のそれと全く範疇を異にするものであることは多く説明を要しないであらう。われわれは『労働配置』『労働配分』の兩語が日本の社會政策學者によつて昨今全く同義語のごとく使用されてゐるのを見、そして『労働配分』なる一語が右にいふドイツの法令上の用語から來てゐることを思ふとき、そこに基本概念における一つの混亂が伏在してゐないかを惧れざるをえないものである。しかも日本の諸學者のあひだには、『労働力配分』と稱する場合の『配分』の語義を、經濟學における傳統的な『資源配分』の語義と異らざるものとして使用してゐる傾向が昨今頗に著しいのであつて、基本概念は二重の混亂を潜めてゐるかのごとく思はれる。すでにわれわれは『配置』概念に最も近いものとして既存の理論のなかに『資源配分』の概念を求めるのであるが、この場合においてすらわれわれは兩

者が同一であるとは主張しない。『配置』概念は『配分』概念との對照によつて、——また『配分』概念を基礎とすることによつて、一定の理論的構成に到達しなければならぬ。

5

しかるに資源または資力の『配分』に關する諸學派の理論および理論史については、おそらく讀者の多少知られるごとく、偶々わが日本の側において綜合的な見解を發展せしめてきたやうな事情にあるので、『資源配置』の概念構成に必要と信じられる基礎的な操作をすべて省略し、『配分』概念はすでに讀者によつて理解され承認されたものとの前提のうへに、われわれの推論をすゝめることが便利であり、且つ適當であらうとおもはれる。²⁾とすれば、客體としての資源または資力はまづもつて一般にその手段性において理解されなければならぬ。『人的資源』なる用語は、人間的存在を見るに國家の一定目的に供せられるべき手段としての角度からするものであり、かゝる角度からの考察を離れてありうべき用語ではない。それは人間力を一定目的のために組織し行使する者の立場を語るものであり、そして『配分』または『配置』は人間力の組織ないし行使に必然的な基本形式にほかならぬ。たゞ『配分』といふ用語は、第一に何ものかの數量的分割を表象してゐるにたいして、『配置』といふ用語は、置かれたる事物の空間的な釣り合ひの感じを表象してゐるにすぎず、それ自體として事物の數量的な分割における釣り合ひの感じを些かも表象するものではない。『資力配分』は經濟理論によつて純粹に數量的な概念であり、『配分』を受けるものはつねに用途諸部門である。それらの諸部門はきはめて抽象的な概念であり、空間的・地域的なものとは些かも結びついてをらぬ。

およそ資力の『配分』が現實に存在するかぎり、それは必ずや空間的に存在するものであり、空間的規定を受けない資力の『配分』といふことは實際上ありえないのであるが、しかし一般に事物の地域的關聯を思惟の表面から捨象し、事物相互の內面的關聯を數量的比例性においてのみ把握することを目的とする經濟理論は、用途諸部門がいかなる空間上の位置關係において存在するかを問はないのである。しかるに『配置』概念は、種類を異にする手段的諸要素の空間的設定に際して、配り合せの關係における合目的性をも語るものであるとすれば、必ずしも同質一定量の資力または手段の『配分』を前提とするものではない。しかし人的資源または人間勞働力の『配置』は、現實の政策行爲者としては、必ずやそれらの『配分』者たる地位の自覺において行はなければならないのは事實であらう。『人的資源の配置』といふ問題は、その基礎においては『配分』の問題を含み、またその反面においては勞働機會の分配賦與の問題を伴ふのである。空間的には立地論的基礎のうへに、數量的には配分論的基礎のうへに、異質の諸要素の組合せの問題としては『結合』理論の基礎のうへに、そしてまた時間的均衡の問題としては再び配分的基礎のうへに、立たなければならぬものと思はれる。

しかしかくのごとき『配置』問題の理論的性格は、政策學者によつて別段の吟味を受けることなく、『配置』と『配分』とは殆ど同義語であるかのごとく用ゐられてゐることは、すでに一言したごとくであつて、いま手許から最近の例を一つ挙げれば、東京帝國大學助教授大河内一男氏によつて與へられた社會政策の定義である。大河内教授は日本經濟政策學會創立大會における研究報告に因んで最近左のごとく述べられてゐる。³⁾――

筆者は上述の學會に於て先輩の驥尾に附して戰時社會政策に關する拙ない報告を行つたが、筆者にとつて

は、經濟政策學會に於て社會政策の報告を行ふことに少からざる意味があつたのである。その際筆者は、社會政策に關する概念規定を行ふことを避けたが、それは「社會政策とは何か」と言ふ盡くるところのない論議を再度繰り返して、與へられた貴重な短い時間を浪費したくなかつたからであつた。

けれども出席の大熊信行教授の極めて的確な質疑に對して、筆者も亦自分なりの社會政策の概念を述べざるを得なかつたのである。當日口頭で教授に對して答へたところを要約すれば、社會政策は何よりも人間『勞働力』man-power全般をその對象とし、その兵力と産業勞働力との間の配分、また産業勞働力に就ては、軍需産業を中心に食糧生産及び輸出産業への勞働力の配分、更に不足せる部分に對する新規勞働力の動員・補填及び陶冶の計畫を行ふと共に、他面に於ては勞働力の磨滅を防ぐと共にその高度化を計るための諸計畫を遂行するものである——換言すれば、社會政策は、國家によつて遂行せられるところの國民經濟に所屬する總勞働力の計畫的配置と合理的・科學的保全のための政策體系である。この際重要なことは、社會政策を社會事業に變質せしめないためには、その對象を何よりも兵力と産業勞働力の兩者を含む意味に於ける人間『勞働力』と考へるといふ點である。蓋しこの二つの man-power の存在様式は、その配置の意味においてもその保全の意味に於ても、相互に不可分に結びついてゐるからである。

こゝに同學會席上における筆者の質疑といふのは、同學會機關誌または報告書に收録される豫定のものであつて、その節口頭をもつて述べ、同時に文書をもつて提出しておいたものなのであるが、右にあらはれてゐる man-power といふ用語や、『配分』といふ用語のごときも、當日は質問者側が用ゐた用語であつたと記憶する。筆者の質問の要旨とするところは、國民經濟内部における人間力の保全および配置といふ標語によつて包括される全體

的な問題領域は兵備體系の問題をも悉く包攝するものとなり、およそ人間力に關するかぎりの國家政策の總體を含むものとならざるをえず、かくては『社會政策』の名によつて意表外なる諸問題を取扱はねばならぬ結果に陥るのではないかといふにあつた。⁴⁾いま、この懸念は教授の應答によつても十分に解かれてはゐない憾みがあるが、しかしそれはしばらく當面の問題ではない。われわれは、人間力の『配分』と『配置』とが同義異語であるかのごとく、あるひは盾の兩面であるかのごとく、並行的に交々使用されてゐるといふ情況をこゝに見いだし、かゝる情況をもつて、兩者が殆ど同義語として用ゐられても無害であるほどに近似した概念であることの證明である。と解するならば、興味は却て深まるものと考へる。しかし、しかしながらかゝる一事の承認は、『配置』概念を基本としつゝある政策學者にとつて、更めて理論問題の新たな負擔に耐ゆべき覺悟を意味するものだといふことを指摘しておく必要があらうとおもはれる。政策學は、理論科學における主體性の恢復および全體性の把握を通してのみ、新しい科學たりうるのであつて、純粹理論にたいする超越批評によつて自己を形成することは不可能である。⁵⁾必要なことは政策學の基礎概念を理論そのものの止揚として樹立することである。

- (1) 日本版『新獨逸國家體系』にしたがふ。
- (2) 資力配分に關する數種の拙著はこゝに列舉する必要なしとおもふ。特に拙著『政治經濟學の問題』(昭和十五年十月刊行)參照。
- (3) 大河内一男『社會政策と經濟政策——日本經濟政策學會「覺書」——(一橋新聞六月二十五日)
- (4) 拙稿『現代政治の科學性』(日本評論九月號)は兵備體系を包括する國家政策の原理を取扱ふものである。同『世界觀批判の未決問題』(公論九月號)は政策原理問題と世界觀との關係についての考案の第一歩である。
- (5) 大河内一男『轉換期の經濟理論』(帝國大學新聞七月十五日)は示唆に富むが、純粹理論にたいする評價およびその止揚の方法が具體的に示されてゐない。